

国際日本 研究センター

International Center
for Japanese Studies

NEWS LETTER ニューズレター

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs>

2013.03 No.

10

・国際シンポジウム開催 International Symposium.....	P1
・言語研究と教育シリーズ 第3回研究会 The 3rd Research Seminar [Language Studies and Education]	P2
・対照日本語部門 研究会報告 第8回研究会 The 8th Research Seminar	P2 ~ 3
・講演会「消滅危機方言から見てくることー奄美語の場合ー」報告 Lecture "An Analysis of Seriously Endangered Languages in Japan; a Case of Amami Go"	P4
・「日本の伝統芸能と音楽のタベ」開催 Evening Lecture: "Introduction to Traditional Japanese Music and Performing Arts"	P4
・2012年度 活動報告(10月~2013年2月) Activity Report (Oct 2012- Feb.2013)	P4

国際シンポジウム「日中台のあいだの〈移動〉と〈応答〉〜ひと、メディア、文学〜」開催 2013年1月31日(木) International Symposium: "Transition and Response between Japan, China and Taiwan: People, Mass media, Literature" Thu. Jan. 2013

講演者：劉振生氏(大連民族学院教授)、佐々木宏氏(時事通信社、台北特派員)、周飛帆氏(千葉大学准教授)



【右から周氏 劉氏 佐々木氏】

中国・台湾・日本において、人々はどう移動し、互いどう応答してきたのか。それは「釣魚島・尖閣諸島問題」で争点となっている今日の東アジア情勢を理解する

うで、どのような手掛かりになるのか。3人のゲストは、そうした問題圏をめぐる、文学・メディア・移民研究という観点から、その歴史と現在に光を当てた。夏目漱石と中島敦の大連経験に焦点をあてた劉振生氏(大連民族学院教授)の「近代日本作家と中国ー夏目漱石、中島敦の『満鉄』とその大連像」では、「D市七月叙景」などの作品で、植民地文化を正面から受けとめていた中島敦に対して、1909年に大連と旅順を旅し、感情の高ぶりを示していた夏目漱石が、日本にもどった後の講演ではナショナルな言説に回帰していくさまが指摘された。台湾で報道の最前線にいる佐々木宏氏(時事通信社台北特派員)の「日台メディア最前線ー日本と台湾、台湾と中国」では、台湾における対日世論調査などのデータも用いつつ、飯島愛の死に強い反応を示し、また、中国資本のメディアによる台湾メディアの統合に危機意識を抱いて激しく抗議行動を展開する台湾の学生など、顔の見える台湾の人びとの様子が報告された。そして周飛帆氏(千葉大学准教授)の「中国移住者のマージナリティとハイブリディティー人の移動から文化の共存を問う」

では、従来の華僑・華人との対比から、海外におけるニューカマーとしての中国人移住者の意識と行動形態が分析され、人・土地・アイデンティティを固定化する見方への批判を踏まえた、人びとのハイブリッド性を重視した文化の共存戦略が提起された。植民地を「満鉄」で旅しながら、植民地に対するステレオタイプからの逸脱を示していた夏目漱石。日本と中国との関係を意識しながら、政治的圧力に冷静に怒り、対処する、日本にとってのかけがえのない友人としての姿をあらためて表している台湾の人びとの感性。それらはナショナリズムに固まった国家間関係に覆われているかにみえて、柔軟に〈移動〉し〈応答〉している人びとの存在を私たちに気付かせる。周教授が精緻に整理したように、硬直化した他者意識とは硬直化した自国に対する国家意識=自己意識の鏡像でしかない。その思い込みを克服したとき、自らのハイブリッド性(=雑種性・異種性・異他性)にもとづく共生の可能性が開かれる。司会の橋本雄一氏(本学准教授)の示唆に従えば、植民地を〈鉄道〉で移動した知識人たちや移民、マス・メディアを通して国家を跨いで接触し文化交流を実践している人びとは、常に移動と応答、変容の空間の中にある。その関係性の理解は、偏狭な領土ナショナリズムに対する効果的な批判である。そしてリージョナルな共生関係をつくるための近道にほかならない。4時間に及ぶ長丁場のシンポジウムであったが、50名を超える学生・教員・研究者・市民の参加があった。記して感謝したい。

(友常勉)



Lecturers : LIU Zhenshen (Dalian Nationalities University, China), SASAKI Hiroshi (Taipei Correspondent, Jiji Press Ltd.), ZHOU Feifan (Chiba University, Japan)

How did people in China, Taiwan and Japan move and responded to each other? In his presentation, "Modern Japanese writers and China: The South Manchuria Railway and its image of Natsume Soseki and Nakajima Atsushi," Professor Liu Zhenshen (Dalian Nationalities University), pointed out the attitudes of Nakajima and Natsume toward colonial culture – the former openly accepted it, while the latter, after travelling in Dalian and Lüshun in 1909 and experiencing life in the colony, returned to Japan and adopted a nationalistic discourse. In the next presentation, "In the Frontline of Japanese and Taiwan Mass media: Japan and Taiwan, Taiwan and China," Mr. Sasaki Hiroshi (Taipei Correspondent, Jiji Press) made use of data from a public opinion poll on Taiwanese' attitudes toward Japan to give a very clear picture of the people of Taiwan. Finally, Professor Zhou Feifan (Chiba University) presented on "Marginality and Hybridity of Chinese Immigrants: Problematising Cultural Coexistence from the Perspective of People's Transition." By analyzing the awareness and behavioral patterns of new overseas Chinese immigrants, he proposed a co-existing strategy for culture which emphasizes the hybridization of peoples. The emcee, Professor Yuichi Hashimoto (TUFS) ended the session by pointing out that an understanding of the relationships between peoples who cross countries to experience cultural exchanges is an effective counter-criticism against narrow-minded territorial nationalism. I would like to thank the presenters and the more than 50 students, teaching staff, researchers and members of the public who participated.

(Tsutomu Tomotsune)

「中国語・英語から見た日本語—外国語教育への応用—」言語研究と教育シリーズ第3回研究会 2012年12月21日(金)

The 3rd Research Seminar [Language Studies and Education] "Comparative Studies between Japanese, Chinese and English for Second Language Acquisition" Thu. Dec.21, 2012

(於アボラ・グローバル プロメテウスホール)

発表者は、張志凌氏(本学博士後期課程学生：タイトル「日中両言語における内部移動表現の相違について—「入る」と〈-進;jin〉を中心に—)、福田翔氏(本学博士後期課程学生：タイトル「可能表現の日本語と中国語の対照研究—日本語の無標識可能を表す自動詞と中国語の可能補語—)、張麟声氏(大阪府立大学：タイトル「対照研究と母語別日本語教育文法の構築」とキャロライン狩野氏(本学教員)、大熊洋祐(リンガハウス)、望月圭子(本学教員)、タイトル「日本語母語話者による英作文誤用コーパスに基づく誤用類型—“in”“on”“at”と対応する日本語との対照—」)である。張志凌氏は、日本語の「入る」と中国語の〈-進;jin〉の意味について、『日本語書き言葉均衡コーパス』を使用し、対照分析を行った。両者はいずれも内部移動という共通の意味を持つが、「入る」が「内部」と「外部」との対立が曖昧な場合が多いのに対し、〈-進;jin〉は、「内部」と「外部」の対立が常に成立し、移動の様態や手段に関心が高いという結果が得られた。

福田翔氏は、日本語の無標識可能(「見つかる」など、見つかることができるという可能の意味を持つもの)と中国語の可能補語を対照し、両者の意味の範囲が異なる要因として発話者の動作主に対する「共感」という概念を取り入れて分析した。Action-resultという可能の概念枠のうち、日本語の自動詞可能はactionが欠如し、この概念を動作主体の意志、願望が自由に設定できることから、共感の程度も変えることができる。一方、中国語の可能補語はAction-resultにかっちりあてはめ、客観的に描写することから、共感を介在させることが難しいのではないかという結論に至った。張麟声氏は、日本語教育のための母語別日本語教育文法の

構築が必要であることを説き、その方法として、目標言語にある特定の形式が母語のどの形式と対応しているかを確定し、そこから、どのような誤用を引き起こしやすいかという点で分類する必要があることを述べた。キャロライン狩野氏は、本学英語専攻1年生の学生による英語作文のデータから、前置詞の誤用に一定のパターンが見られることを示した。もっとも多い誤用はonを使用すべきところで inを使用しているもの(*in→on)で全ての誤用のうち、44.7%を占める。次に*in→ at が33.5%と多く、*at→in、*on→inなどが続く。日本語の助詞「で」「に」「の」との対応も示された。

今回の研究会は、類似表現の意味分析、日本語教育への応用、誤用コーパスなど、対照研究の様々な可能性を示した点で意義は大きい。当日は、各セッション平均20名ほどの参加者が集まり、活発な質疑応答が交わされた。(谷口龍子)



【発表者と国際日本語教育部門のメンバー】

The presenters were **Zhang Zhiling (PhD candidate, TUFS)**, "Differences between expressions of internal movement in Japanese and Chinese – focusing on "hairu" and "〈-進;jin〉," **Sho Fukuda (PhD candidate, TUFS)**, "Contrastive research on potential expressions in Japanese and Chinese –Japanese unmarked potential intransitives and Chinese potential complements," **Zhang Linsheng (Professor, Osaka Prefecture University)**, "Contrastive research and construction of mother tongue-based Japanese language grammar," and **Caroline Kano (Visiting faculty member, TUFS)**, **Yosuke Okuma (Lingua House)**, **Keiko Mochizuki (Professor, TUFS)**, "Typology of errors based on corpus of errors in English compositions by native Japanese speakers – comparison of "in," "on," "at" with the corresponding Japanese forms." Zhang explained that "hairu" in Japanese and "〈-進;jin〉" in Chinese share the same property of internal movement. While the contrast between "internal" and "external" in "hairu" is sometimes ambiguous, the contrast between "internal" and "external" in "〈-進;jin〉" is always established. Fukuda compared Japanese unmarked potential forms (those which have a potential meaning such as "mitsukaru") and Chinese potential complements, and included the concept of the speaker's "empathy" for the actor. In the conceptual framework for potential, Action-result, Japanese intransitive potential forms do not include action and allow the degree of empathy to change, but Chinese potential complements reflect the Action-result concept and are objective, and it is therefore difficult to intercept with empathy. Zhang Linsei stressed the importance of constructing Japanese grammar according to learners' mother tongues in Japanese language education. Professor Caroline Kano and her colleagues explained the patterns of prepositional misuse such as *in→on, *in→at, *at→in, *on→in she discovered from the data on English compositions written by first-year students in the English Department. This seminar was significant in highlighting the various potential for comparative research in areas such as semantic analyses of similar expressions, applications to Japanese language education, and corpus of misuse. (Ryuko Taniguchi)

対照日本語部門 研究会報告『外国語と日本語との対照言語学的研究』第8回研究会 2012年12月22日(土)

The 8th Research Seminar "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" Sat. Dec. 22, 2012

日時：2012年12月22日(土) 13:50～17:30

場所：東京外国語大学 語学研究所(研究講義棟4階419号室)

発表者・講演者と題目：

降幡正志氏(東京外国語大学)

研究発表「“泥棒は捕まえられることに成功する”のか？
—インドネシア語のいわゆる受動態をどう教えるか—」

匹田剛氏(東京外国語大学)

研究発表「ロシア語の有生性に関する一致をめぐる」

森山卓郎氏(早稲田大学)

講演「文学表現の文法的分析へ向けて」

対照日本語部門では、プロジェクトの一環として、諸外国語と日本語との対照研究をテーマに定例の研究会を行っている。2012年度における2回目(通算8回目)の研究会は、上記の通り開催された。年末に向けた時期であるにもかかわらず、学内・学外あわせて約20名の参加者があり、率直な質疑応答および熱心な意見交換が行われた。

降幡氏の発表タイトルは興味を引かれるものである。インドネシア語の他動詞文では、文の主語が動作主であるか、あるいは文の主語は動作の対象物であって、動作主



【降幡氏】

は別の第3人称にあたるものであるかによって、動詞に異なる接頭辞が付加されて用いられる。後者の構文は動作主が“oleh ~” (= ~によって) を伴って示されることもあり、これを「受動態」の1つととらえるか否か、インドネシア語の文法論でも立場が分かれているとのことである。「受動態=“れる・られる”」と短絡的に結び付けてしまうと、標題のような誤訳を生じることにもなり、日本人学習者には注意が必要な構文のようである。場合によっては(対話者間での了解があれば)後者の構文の動作主は第1・第2人称にあたるものであってもよいという点も興味深い。他にも、受け身的事象を述べる際に関連するいくつかの接辞について、興味深い豊富な例が示された。



【匹田氏】

匹田氏の発表は、ロシア語の名詞句内における性・数・格・有生性の一致の現象に着目し、対格が属格と同形になる場合の条件とは何かを考察しながら、一致素性の中において格が興味深い振る舞いを見せていることを議論したものである。参加者との質疑応答からは、ロシア語における「属格」とは何かという根本的な議論へも話は展開

した。具体的な例として挙げられた数詞をめぐる議論も興味深い。

森山氏の講演は、文学的表現を支える日本語文法を分析・記述しようという壮大なテーマのもと、連用形を持つ表現効果、条件節や格助詞の効果的な使い方、修辞法としての独立名詞、副詞の拡張的な用法など、豊富な例とともに、参加者に日本語の世界の豊かな広がりを感じさせる内容の話であった。後半には中国語、韓国語、英語などとの対照の例も挙げられ、質疑応答においては参加者それぞれが専門とする諸言語との比較対照の例などもめぐり活発にやりとりが行われた。文学的表現の美しさ・おもしろさを文法論的に解説し、楽しもうという試みは、日本語教育にも応用可能な面があるのではないだろうかと感じさせた。氏の臨場感あふれる朗読の美しさにも触れ、言語の持つ音声的な力強さという側面もあらためて感じさせられる講演であった。

(鈴木智美)



【森山氏】



Masashi Furihata (TUFS) “Can the thief be caught successfully? – how to teach the so-called passive form in Indonesian”

Tsuyoshi Hikita (TUFS) “Agreement of animacy in Russian”

Takuro Moriyama (Waseda University) “Toward a grammatical analysis of literary expressions”

According to Professor Furihata, in transitive sentences in Indonesian, a different suffix is added to the verb based on whether the subject of the sentence is the actor or the object of the action. As to whether the latter type can be classified as a “passive form,” he explained that there was still no definite position within Indonesian grammar theory. He further provided interesting examples of a few suffixes used to express passive situations.

In Professor Hikita’s presentation, he focused on the phenomenon of agreement of gender, quantity, case, and animacy within a noun phrase in Russian to examine the conditions for the accusative to take the same form as the genitive the, and explained the interesting features case exhibits within the features of agreement.

Under the theme of analyzing and describing Japanese grammar which supports literary expressions, Professor Moriyama gave numerous examples to show the effectiveness of the *renyo* (continuative) form, effective uses of conditionals and particles, effectiveness of independent noun phrases, extended usages of adverbs, etc. Later, he also raised examples from Chinese, Korean and English, which sparked lively discussions among the participants as they compared the presentation with their respective specialized languages in the Q & A session.

(Tomomi Suzuki)

講演会「消滅危機方言から見えてくることー奄美語の場合ー」報告 2012年10月25日(木) Lecture “An Analysis of Seriously Endangered Languages in Japan; a Case of Amami Go” Thu. Oct. 25, 2012

講演者：木部暢子氏(国立国語研究所時空間変異研究系教授)



【木部暢子氏】

社会言語部門では「日本語の多様性を探る」をテーマに複数のプロジェクトを手がけている。その一環として木部暢子氏を迎えて講演会を行った。当日は学部学生、大学院生や教員、一般参加者も含めて100人を超える参加者を得ることができた。

「奄美語」はユネスコの「世界危機言語地図」において確定的な危機(definitely endangered)にあるとされた言語である。

人口約13万人の奄美群島のうち、奄美語の話者は特に高齢者が多く、現状では他の琉球諸語同様に消滅の危機が「確定的」であることを意味している。木部氏の講演はまず、奄美語をとりまくこういった基本的な状況と、北琉球方言である奄美語の構造についての概説から始まり、奄美語の方言の一つである喜界島方言の音

韻構造についての詳しい説明が展開された。奄美語は地元では「シマグチ」と称されることがあり、このシマとは、集落共同体のことである。地元の人びとには、シマごとのことばの違いは生活の中で意識されてきたが、わずかな距離しか離れていないシマ同士でも音韻構造の違いがある。その規則性を解明する過程は、詳細で実に興味深いものだった。木部氏の話はこれまでの喜界島での調査の意義と、今後の可能性を我々に伝えてくれた。特に学部生には少し専門的な話かとも思われたが、こうした地道なフィールドワークが、言語研究を支えているのだということは伝わったはずである。言語学・方言学の研究領域としては、このような言語内の事象の分析がメインになるのだが、こうしたシマごとの違いを生んだ歴史的・社会的背景を社会言語学の手法で解明する必要がある。奄美語の現状認識と、それをいかに維持できるかという二つの課題が、複数領域の研究者をつなぐことでより具体的になると考えさせられた。

(前田達朗)

Lecturer: Nobuko Kibe (National Institute for Japanese Language and Linguistics, Japan)

More than 100 students, teaching staff and members of the public participated. Amami is specified as a “definitely endangered” language in UNESCO’s Atlas of the World’s Languages in Danger. Many of its speakers are the elderly. In her presentation, Professor Kibe explained this linguistic situation and the structure of Amami, a North Ryukyuan dialect. She also gave a detailed explanation on the phonological structure of the Kikai Island dialect. Amami is referred to as “Shima-guchi” by the locals. “Shima” is more than just an “island”, its Japanese meaning; it means a “community.” Variants occur between villages and in particular, differences in local vocabulary are emphasized. That structural differences in phonology within such a small area are discovered shows how significant linguistic methods are. Although the analysis of such linguistic phenomena is a main task in linguistic and dialectal research, it is also necessary for sociolinguistics to explain the historical and social backgrounds that created these differences. Therefore, when considering “Diversity of Japanese,” the research theme for the Sociolinguistics Division, there is a need to link up with researchers from multiple fields.

(Tatsuro Maeda)



「日本の伝統芸能と音楽の夕べ」開催 2013年2月19日(火)

Evening Lecture: "Introduction to Traditional Japanese Music and Performing Arts" Tue. Feb. 19, 2013



【右から有澤氏、内間氏、大木氏】

昼間は雪がちらついていたのに、夜のうちに桜が咲き出した。プログラムの第一部「音楽」以前 - 伝統芸能のなかの「音」は、梶宅聡さん(能楽師、森田流笛方)。「ウタ」「マイ」「ハヤシ」などの能の基本的な言葉を説明しながら、名曲「井筒」の解説と謡の指導。そしてワキを呼び寄せる登場場の笛、謡の実演。会場はびしりとした空気に打たれる。うってかわって第二部は、有澤知乃さん(東京学芸大学留学生センター講師)の司会・コーディネートで「日本の三味線南から北から」。有澤さんから、中国三味線が琉球を経由して日本の東北まで伝播した歴史と、その過程で構造を変えていった三味線の特徴が説明された。そして演奏。はじめは大木理恵さん(東京外国語大学留学生日本語教育センター非常勤講師)による津軽三味線「津軽あいや節」「十三の砂山」。そして大木さんオリジナルの「津軽じょ

んから節」を演奏する。華麗かつ超絶技巧の妙技に酔いしれた。次は内間安希さん(本学日本語課程学生)による沖縄三線の演奏と歌。宮廷調の「かぎやで風」のあと、「本部ナークニー・汀間」とのメドレー。曲の背景も学びながら、雅びな沖縄音楽に浸る。そして最後に内間さんの演奏で「かちやーしー」を本センター教員の前田達朗さんの指導と音頭で、参加者全員が立ち上がって踊りに加わった。高度な精神世界を完成した中世芸能と、庶民のあいだで多彩に発展していった南と北の民謡。三つの世界の不思議なとりあわせが創り出した貴重な時間。実演・演奏の方々はみな本学の関係者(梶宅さん、有澤さんともに本学OB)ということもあって、春の饗宴ははじめから終わりまでうちとけた雰囲気にとけこんだ。終了後、四〇名あまりの参加者はみな上気した顔で散開した。(友常勉)



【音楽の夕べの締めくくりは、カチャーシーで盛り上がる】



【梶宅氏】

The first part of the program, "Before the Music: "Sound" in traditional Japanese Performing Arts" was presented by **Mr. Satoshi Tsukitaku, a Noh pipe player of the Morita school**. Through explanations on the basic terms used in Noh - uta (song), mai (dance), hayashi (music), he explained and coached a tune from "izutsu." This was followed by a flute and song performance. The second part of the program was presented by **Dr. Shino Arisawa (lecturer, Tokyo Gakugei University)**, the emcee and coordinator of the lecture, and entitled "Shamisen: From South to North." Dr. Arisawa explained how the shamisen came from China via Ryukyu and spread to the Tohoku region, and pointed out the features of the shamisen which went through some transformations along the way. This was followed by performances from **Rie Ohki (lecturer, TUFS)** on the tsugaru-shamisen, and **Yasuki Uchima (student, TUFS)** on the okinawa-sanshin. The audience who participated in this spring soiree was mesmerized by the wonderful combination of the three worlds of medieval art, and tunes from the south and north. (Tsutomu Tomotsune)

2012年度 活動報告(10月～2013年2月)

Activity Report (Oct. - Feb. 2013)

■講演会・ワークショップ等■

- 10月18日(木) 国際日本研究センター主催報告会 谷和明氏、宮城徹氏(東京外国語大学)
- 10月25日(木) 社会言語部門主催講演会「消滅危機方言から見てくることー奄美語の場合ー」 木部暢子氏(国立国語研究所)
- 12月21日(金) 国際日本語教育部門 主催 言語研究と教育シリーズ第3回研究会「中国語・英語から見た日本語ー外国語教育への応用ー」張麟声氏(大阪府立大学)、張志凌氏、福田翔氏(東京外国語大学博士後期課程)、キャロライン狩野氏、望月圭子氏(東京外国語大学)、大熊洋祐氏(リンガハウス)
- 12月22日(土) 対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第8回研究会 森山卓郎氏(早稲田大学)、西田剛氏、降幡正志氏(東京外国語大学)
- 1月25日(金) 国際日本研究センター主催『国際日本学』テキストの作成に向けて第1回研究会 近藤安月子氏(東京大学)
- 1月31日(木) 比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 国際シンポジウム『日中台のあいだの(移動)と(応答)ーひと、メディア、文学ー』周飛帆氏(千葉大学)、劉振生氏(大連民族学院)、佐々木宏氏(時事通信社台北特派員)
- 2月13日(水) 比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 講演会「トルコにおける日本文学の翻訳」オズ・バイカラ氏(トルコ・ボアジチ大学)
- 2月19日(火) 国際日本研究センター主催『講演会「日本の伝統芸能と音楽の夕べ」梶宅聡氏(能楽師・森田流笛方)、有澤知乃氏(東京学芸大学留学生センター講師)、大木理恵氏、内間安希氏(東京外国語大学)
- 2月26日(火) 国際日本研究センター主催『国際日本学』テキストの作成に向けて第2回研究会 山本富美子氏(武蔵野大学)

■会議歴■

- センター会議: 2012年 10月11日、11月9日、12月13日、2013年1月11日、2月14日
- 部門会議: 2012年 10月5日、17日、11月9日、16日、12月6日、21日、2013年1月11日

■今後の活動予定■

- 3月6日(水) 18:00～ 特任研究員ワークショップ 発表者: オクサーナ・アサドチフ氏(タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学付属言語学院)
- 3月9日(金) 13:50～ 対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第9回研究会 発表者: 鷲尾龍一氏(学習院大学)、石井哲士朗氏、佐野洋氏(東京外国語大学)
- 3月16日(土) 15:00～ 国際日本語教育部門 主催「理解・産出における母語の影響への取り組み」国際シンポジウム 発表者: 秋廣尚恵氏*(エクス・マルセイユ大学)、タサニ・メーターピシット氏*(タマサート大学)、キャロライン狩野氏*、マシュー・ミラー氏、榮谷温子氏*、小柳昇氏*、鈴木美加氏、望月圭子氏、谷口龍子氏(東京外国語大学) *5名: 国際日本研究センター特任(連携)研究員
- ★ジャーナル『日本語・日本学』論文公募開始 (エントリー〆切: 2013年7月)

■Symposiums and Lectures■

- 18 Oct.: **Debrief Sessions** by Kazuaki Tani, Toru Miyagi, TUFS, Japan
- 25 Oct.: **Lecture "An Analysis of Seriously Endangered Languages in Japan; a Case of Amami Go"** by Nobuko Kibe, National Institute for Japanese Language and Linguistics, Japan
- 21 Dec.: **[Language Studies and Education] The 3rd Research Seminar "Comparative Studies between Japanese, Chinese and English for Second Language Acquisition"** by Zhang LinSheng, Osaka Prefecture University, Zhang ZhiLing, Sho Fukuda, PhD Candidate TUFS, Caroline Kano, Keiko Mochizuki, TUFS, Yosuke Ohkuma, Lingahouse, Japan
- 22 Dec.: **"Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 8th Research Seminar** by Takuro Moriyama, Waseda University, Tsuyoshi Hikita, Masahi Furihata, TUFS, Japan
- 25 Jan.: **1st Research Meeting "Towards the Textbook Production for International Japanese Studies"** by Atsuko Kondoh, The University of Tokyo, Japan
- 31 Jan.: **International Symposium "Transition and Response between Japan, China and Taiwan: People, Mass media, Literature"** by Liu Zhenshen, Dalian Nationalities University, China, Hiroshi Sasaki, Taipei Correspondent, Jiji Press Ltd., Zhou Feifan, Chiba University, Japan
- 13 Feb.: **Lecture: "Translation of Japanese Literatures in Turkey"** by Oguz Baykara, Bogazici University, Turkey
- 19 Feb.: **Evening Lecture: "Introduction to Traditional Japanese Music and Performing Arts"** by Satoshi Tsukitaku, Noh Pipe Player of Morita-Ryu, Shino Arisawa, Tokyo Gakugei University, Rie Ohki, Yasuki Uchima, TUFS, Japan
- 26 Feb.: **2nd Research Meeting "Towards the Textbook Production for International Japanese Studies"** by Fumiko Yamamoto, Musashino University, Japan

■Meetings■

- Center meetings: 2012 - 11 Oct., 9 Nov., 13 Dec., 2013- 11 Jan., 14 Feb.
- Division meetings: 2012 - 5; 17 Oct., 9; 16 Nov., 6; 21 Dec., 2013- 11 Jan., .

■Future Events■

- Wed. 6 Mar.(18:00-) **The 2nd ICJS Joint Researchers Workshop** "Design of the course of Japanese language teaching in higher educational establishments in Ukraine" by Asadchih Oksana, Taras Shevchenko National University of Kyiv, Ukraine
- Sat. 9 Mar.(13:50-) **"Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 9th Research Seminar** by Ryuichi Washio, Gakusyuin University, Teshiro Ishii; Hiroshi Sano, TUFS Japan
- Sat. 16 Mar.(13:50-) **"International Symposium "Influence of Mother Tongues on Understanding and Production"** by Hisae Akihiro, Aix-Marseille University, France; Tasanee Methapisit, Thammasat University, Thailand
- ★**"Journal for Japanese Studies" Entry Deadline: July 2013**